

藤澤桂が取材を申し込んできた。フリーライターの彼女が、E T U にアポイントを取るのには珍しいことではない。だが、有里は取材対象の名前を確認するために、再度メールを読み返さずにはいらなかった。

E T U 広報部永田有里。藤澤に指名されたのは、他ならぬ彼女自身だった。

アスリートをアイドルのように取り上げることで有名な女性向けのスポーツ専門誌が「プロの世界で活躍する女性」をテーマに特集を組むのだという。有里はメールをプリントアウトして部長に手渡した。多少のことには動じない、笑顔がトレードマークの上司の許可が下りなければ、広報の仕事は動かないのである。

「スタッフが取材される側になるなんて、これもチーム躍進のおかげだね。取材の日は永田君が先方と相談して決めればいいよ」

「雑誌に取り上げられるなんてすごいじゃない。僕も今からインタビューのイメトレしておこうかなあ」

のんきな表情で佐藤が笑う。クラブのGMを務める後藤のように、選手としてピッチを駆けた経験のある者は取材を受けることに慣れているが、有里や佐藤にとってメディアの取材は立ち会うものだ。取材を受けるという未知の出来事に、佐藤が浮き足立つのも無理はない。

「藤澤さんが相手なら有里ちゃんも気楽だろうし、俺が反対する理由はどこにもないよ。それに、取材される人

の視点や気持ちを知っておくのも、有里ちゃんには良い経験になるんじゃないか？」

クラブハウスに戻って有里宛てのメールを見せられた後藤も、広報部長と同じく有里が取材を受けることに賛成だった。

「後藤さん、私に経験積ませるの好きだよね」

「人材を育てるのは俺の仕事だからね」

フットボールクラブのGMとして、彼は選手だけではなくスタッフの育成にも力を入れている。特に有里に寄せる期待は大きく、彼女をクラブ全体を背負って立つような人間に育て上げることが自分の目標だと、素面で言い放ったこともある。

「……もしも私が選手だったら、インタビューを受けて取材に慣れなさいって言われても納得できるんだけどなあ」

有里の言葉に、後藤はパソコンのモニターから視線を移した。訝しげな瞳には、糸のようにもつれた有里の心が映っている。

「何かが引つかかるんだよね。後藤さんが言う通り、取材を受けるっていう経験が、私にとってプラスになるのは間違いないだろうけど」

複雑に絡み合った問題を解きほぐす器用さも、引きちぎる力強さも後藤は持っていない。だが、真摯に、そして粘り強く問題に対処する彼だからこそ、有里は整理で

きない感情やまとまらない言葉をさらけ出すことができるのだった。

「藤澤さんにはお世話になってるから、この話は受けたいし、取材が嫌なわけじゃないんだよ。でも」

軽く頷いて、後藤は有里の言葉を待つ。やや頼りない面もあるが、彼は信頼できる上司だ。ETUは小さなクラブだが、GMにまで昇りつめ、達海猛を監督として招聘した実績と、プロサッカー選手のセカンドキャリアに対する世間の関心を考慮に入れば、スポーツ専門誌はおろか、ビジネス誌や一般紙が取材に来て不思議ではないだろう。何と言っても、後藤のファンが喜ぶことは間違いない。身を包むユニフォームの色が変わっても、浅草の人々が彼の動向を気に掛け、その活躍に温かい言葉を口にしていたことを有里は覚えていた。

「でも、だからこそ、私でいいのかなって疑問が出てくるんだよね。後藤さんみたいに表舞台にいた人や、お父さんみたいに偉くなっちゃった人ならともかく、世間が私みたいな平仄報に関心があるとは思えないよ」

「有里ちゃん。若い女の子向けの雑誌が求めていることが、俺に答えられると思う？」

後藤に問われ、有里は首を大きく横に振った。彼に求めているのは、とりとめのない言葉に耳を傾ける姿勢であって、疑問の答えではない。頭の固い会長を筆頭に、ETUのフロントに若い女性の心理を理解できる男性は

存在しないのだった。

「疑問があるなら、取材の内容を確認してから受けるかどうかを決めればいいし、藤澤さんなら、有里ちゃんやクラブに都合の悪い事は書かないだろう」

藤澤は有里や後藤だけではなく、人前で話すことが苦手な椿とも良好なコミュニケーションを築いている。クラブとメディアにとつて、信頼は大きな財産なのだ。

「その藤澤さんが、こういうミーハーな雑誌の仕事を受けるとは思わなかったよ。フリーライターって大変なんだね」

ブックスタンドから雑誌を抜き取って、有里は付箋を貼り付けておいたページを開いた。川崎フロンティアの若手選手が、練習場でポーズを取っている。爽やかな笑顔が彼女の口角を刺激するのは、ピッチで激しくボールを追い、獣のように雄叫びを上げる彼らの姿を知っているからだ。

「……川崎のファン感のテーマがアイドルだったのは、こんな理由があったのか」

「ああいうクラブのスタッフなら、話を聞きたいって人も多いんだろうけどね」

ネットで拡散された動画を思い出したのか、後藤がわずかに眉を寄せた。ホームタウン活動を始めとする企画力において、川崎を上回るクラブはリーグジャパンには存在しない。バラエティに富んだイベントを集客につな

げる姿勢は、若いアスリートを使って読者にスポーツのルールや試合に興味を持たせる女性向けスポーツ専門誌との相性も良いだろう。

「この雑誌の読者は、あまりスポーツに詳しくない若い女の子が多いんだっけ？」

有里は頷いて後藤に雑誌を手渡した。スポーツ観戦の初心者を対象にしているためか、各地のスタジアム情報充実にしている。

「編集部がこういう特集を組んだのは、プロスポーツの世界で働いている女性に関心がある読者が多いからじゃないかな。選手や試合だけじゃなくて、さっき話した川崎みたいに、クラブスタッフの仕事が気になる子が出てきても不思議じゃないだろう」

「その気持ちだったら、少し分かるかも」

手探りで、そしてがむしやらにE T Uで働く方法を考えていた日々を幼い頃を思い浮かべながら、有里は顎に手を置いた。後藤が「子」と表現した顔も名前も知らない読者が、どことなく身近な存在になった気がする。

「ありがとう、後藤さん。おかげで、取材も大丈夫な気がしてきたよ」

「有里ちゃんの間違いなく、今期のクラブ躍進の立役者の一人なんだ。堂々とインタビューに答えて、E T Uにはこんなに立派なスタッフがいますって、たまには俺に自慢させてくれ」

「そこは『永田有里は俺が育てた』じゃないの？」

有里の笑い声がオフィスに響く。彼女のインタビューが掲載された女性向けの雑誌を購入して、我が事のように得意げに見せて回る姿が想像できるのに、後藤は自身の手腕や功績のアピールには呆れるほどに無頓着だ。現役時代に、一つのミスが失点につながる、重要だがあまり活躍が目立たないD Fというポジションに就いていたことが関係しているのかもしれない。

「後藤さんは、私や達海さんのことを褒めてばかりいないで、もっと自分のしたことに胸を張りなよ」

笠野さんには敵わない。人生経験や能力の差を考えれば、後藤の言葉は間違っていないのだろうが、有里は時おり、彼の自己評価を無性に歯がゆく感じることもあるのだった。

「いいこと思いついた。藤澤さんを通じて、雑誌の編集の人にイケメンスタッフ特集を組んでもらおうよ。それで、ウチは後藤さんを取り上げてもらって、若いファンの開拓を目指すの。仕事ができる年上の男の人って、頼りになるから人気があるし、後藤さんは年齢の割に若く見えて顔も悪くないから、グッズ作れば売り上げも期待できるかも！」

「それ、本気で言ってる？」

後藤の眼差しは疑わしげだ。有里が自信を持って開発したグッズの数々が、倉庫のダンボール箱に押し込めら

れている現実を見れば、GMのグッズ展開は慎重に進めるべきかもしれない。

「そうだよね。またETUが変なグッズ作ったなんて、ネットで言われたくないもんね」

「俺が気にしてるのはそっちじゃないよ。頼りになる大人の男が女性に求められるのは分かるけど、俺は自分がそこに含まれているとは思えないんだ」

肩をすくめる後藤に向かって、有里は顔をしかめた。

「後藤さん、もつと自分に自信持ちなよ。謙遜通り越して自虐になってるじゃない」

「そうは言うけどな、有里ちゃん。俺はしょっちゅう職場の若い女の子にからかわれてるんだ。頼りになる大人なら、多分、そんなことにはならないんじゃないか」

思わず有里は唇を結んだ。思ったことを口に出す持ち前の性格と付き合いの長さから、後藤には気安く接していたが、互いの立場と年齢を考えれば、彼への甘えがあることは否定できない。

「まあ、若い部下の態度を大目に見るのも、大人の男の度量かもしれないな」

後藤は笑って立ち上がり、有里の頭に手を置いた。やや乾いた指先が、幼い頃に読んだ物語を彼女に思い出させる。

西遊記の孫悟空のように、自分が駆け回っているのは後藤の掌の上なのかもしれない。